智晓敏 著

自动词及情感动词被动表现的中日对照研究

自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照研究

浙江工商大学

智晓敏 著

自动词及情感动词被动表现的中日对照研究

自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照研究

浙江工商大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

自动词及情感动词被动表现的中日对照研究 / 智晓敏著. — 杭州 : 浙江工商大学出版社, 2018.8

ISBN 978-7-5178-2085-7

Ⅰ. ①自… Ⅱ. ①智… Ⅲ. ①动词—比较词汇学—汉语、日语 Ⅳ. ① H146.2 ② H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2018) 第 150856 号

自动词及情感动词被动表现的中日对照研究

智晓敏 著

责任编辑 姚 媛
封面设计 林朦朦
责任印制 包建辉
出版发行 浙江工商大学出版社
(杭州市教工路 198 号 邮政编码 310012)
(E-mail : zjgsupress@163.com)
(网址 : http://www.zjgsupress.com)
电话 : 0571-88904980, 88831806 (传真)
排 版 庆春籍研室
印 刷 虎彩印艺股份有限公司
开 本 880mm×1230mm 1/32
印 张 8
字 数 208 千
版 印 次 2018 年 8 月第 1 版 2018 年 8 月第 1 次印刷
书 号 ISBN 978-7-5178-2085-7
定 价 28.00 元

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江工商大学出版社营销部邮购电话 0571-88904970

目　次

第1章　序 論 001

1.1　研究動機及び目的 001

1.2　研究方法 002

1.3　本論文の構成 003

第2章　日本語の受身表現についての先行研究 008

2.1　「受身」の一般的な定義 008

2.2　日本語の受身名称の変遷 015

2.3　日本語の受身表現の分類に関する史的研究 018

2.4　先行研究から見る日本語の受身の特徴 045

第3章　感情動詞の受身表現及び分類に関する先行研究 048

3.1　感情動詞の受身表現—現在の問題点 048

3.2　感情動詞の受身表現に関する先行研究 049

3.3　先行研究における感情動詞の分類 069

3.4　まとめ 085

第4章　「ニ」格感情動詞の直接受身表現に関する分析 086

4.1　「ヲ」格感情動詞の直接受身表現 087

4.2　「ニ」格の感情動詞の直接受身表現 098

4.3 「ニ」格の深層格 110

4.4 「ニ」格感情動詞の「ニ」格を表す深層格 ... 119

4.5 「ニ」格感情動詞の深層格と直接受身表現 ... 123

4.6 対象格を持つ「ニ」格感情動詞の直接受身成立と有情物、無情物の関係 128

4.7 「ニ」格感情動詞の直接受身文の成立条件のまとめ 134

4.8 まとめ 135

第5章 中国語の受身表現 137

5.1 中国語の受身の定義及び分類 137

5.2 中国語他動詞の受身表現及び成立条件 151

5.3 中国語の自動詞の受身表現 159

5.4 中国語感情動詞の受身表現 185

第6章 自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照 197

6.1 日中自動詞の直接受身表現の対照 197

6.2 日中感情動詞の直接受身表現の対照 198

第7章 まとめ及び将来の課題 201

7.1 序論 201

7.2 日本語の受身表現についての先行研究 201

7.3 感情動詞の受身表現及び分類に関する先行研究 207

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7.4 「ニ」格感情動詞の直接受身表現に関する分析 213

7.5 中国語の受身表現 220

7.6 自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照 229

参考文献 233

謝　辞 247

第1章

序論

1.1　研究動機及び目的

本論文の主題は、従来問題となってきた「ニ」格感情動詞の直接受身及び間接受身成立の条件を明らかにすることである。日本語の直接受身（普通の受身）は、一般的に他動詞に成立するものとされ、「ヲ」格をとる動詞とされてきる。しかし、日本語の感情動詞においては、「学生は先生ニ感謝した」→「先生は学生に感謝された」というように「ヲ」格ではなく、「ニ」格をとる感情の自動詞にも直接受身（普通の受身）が成立することが分かる。

この「ニ」格をとる感情動詞（自動詞）にも直接受身（普通の受身）が成立するという問題点から、寺村は「ヲ」格をとる動詞ではなく、「直接受身」が成立するものが他動詞であると逆に定義を変えた。これは三上章が動詞一般に関して行った他動詞の定義を適用したものであると思われる。しかし、問題は「ヲ」格のような客観的に観察可能なものではなく、「直接受身」という日本語母語話者の言語直観に頼るものであり、特に外国人日本語学習者にとっては認識困難なものである。また、この「ニ」格をとる感情動詞は直接受身になるものとならないものとが存在している。これを区別する基準も母語話者の直観以外には客観的なものはない。この「ニ」格感情動詞で直接受身になるものと間接受身

になるものの基準が何であるのかについて多くの研究が行われた。しかし、工藤真由美（1990）のように、その感情動詞の持つ「対象に対する積極的な心的な態度を表すもの」が直接受身を成立させる感情動詞であるとか、角田（2009）のように、動詞などを分類し、「直接影響」から「能力」までの７段階を設け、その言葉の他動性の強さが直接受身を可能にするかどうかの基準としている。しかし、個々の動詞の他動性の強弱の判定は極めて曖昧なものであり、外国人日本語学習者にとっては、これも認識困難なものである。

この「ニ」格感情動詞の直接受身及び間接受身成立の客観条件を探ることが本論文の主旨である。

1.2　研究方法

研究方法としては、日本語の感情動詞の受身表現には、日本語の受身表現全体の問題が深く関わっているため、その全体像を整理し明確にする必要がある。そのため、受身研究の歴史的な流れを追い、そこから現在の受身研究のキーワードになっている「直接受身」、「間接受身」、或いは「被害・迷惑の受身」、さらに受身表現における有情性、無情性について、先行研究の成果を追究していく。そして、日本語の感情動詞の受身に関する先行研究を基に、「1.1の研究動機及び目的」で述べた「ニ」格感情動詞の直接受身及び間接受身成立の客観条件の問題点を明らかにしていく。また、日本語の「ニ」格感情動詞は、他動詞ではなく、自動詞として位置付けられるため、自動詞の受身についても考察していく。さらに、この「ニ」格感情動詞の問題は「表層格」の「ニ」と「ヲ」にも深く関係しているため、その「深層格」を追究する必要がある。そのため、国立国語研究所の『日本における表層格と深層格の対応関係』（1997）を基に「ニ」格の深層格を分析し

ていく。さらに、中国語母語話者のために、同時に中国語における受身表現と、現在中国語で問題になっている自動詞の受身表現について分析する。また、中国語における「直接受身」、「間接受身」及び「被害・迷惑の受身」、中国語における感情動詞の受身表現についても分析し、日本語との対照研究を行い、日中両言語の共通点及び相違点を明らかにし、中国人日本語学習者の学習の一助となるようにする。

1.3　本論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

第1章　序論

研究動機及び目的、研究方法、本論文の構成について述べる。

第2章　日本語の受身表現についての先行研究

2.1「『受身』の一般的な定義」においては、ヨーロッパ言語における「受動態」の定義及び、日本語の「受身」の定義について論じる。

2.2「日本語の受身名称の変遷」については、「受身」という名称に至るまでの名称の変遷について歴史を辿って見る。

2.3「日本語の受身表現の分類に関する史的研究」では、ロドリゲスから富士谷成章を経て幕末に至るまでの明治以前と明治時代から現在に至るまでの二つの時期に分け、「受身の主語の有情性と無情性という観点」、「直接・間接という構造的観点」、「被害・迷惑性という意味的観点」の三つの観点から、日本語の受身の用法、分類について考察する。

2.4「先行研究から見る日本語の受身の特徴」では、受身の特徴をまとめ、また、日本語の自動詞受身表現の間接性について分

析し、さらに、自動詞受身表現の被害・迷惑性について分析する。

第3章　感情動詞の分類及び受身表現に関する先行研究

3.1「感情動詞の受身表現—現在の問題点」では、現在問題となっている「ニ」格感情動詞の受身表現の問題点について考察する。

3.2「感情動詞の受身表現に関する研究」では、感情動詞の受身表現の研究について、寺村秀夫、工藤真由美、角田太作の受身研究、三原健一、北村ようの見解について考察し、まとめる。

3.3「感情動詞の分類」では、寺村秀夫、工藤真由美、吉永尚、三原健一、山岡政紀、山川太、北村よう、原沢伊都夫の感情動詞の分類について分析し、まとめる。

3.4では、第3章についてまとめる。

第4章「ニ」格感情動詞の直接受身表現に関する分析

本章では、日本語の感情動詞の直接受身表現について分析を行う。

4.1「『ヲ』格感情動詞の直接受身表現」では、まず、一般的な「ヲ」格感情動詞の直接受身表現について取り上げ、また、特別な「ヲ」格感情動詞の直接受身表現である「自発的受身」について分析し、まとめる。

4.2「『ニ』格の感情動詞の直接受身表現では、まず、直接受身が成立する「ニ」格感情動詞を分析し、次に、他の「ニ」格感情動詞の直接受身表現について論じる。

4.3「『ニ』格の深層格」においては、「格文法と深層格」については、フィルモア及び国立国語研究所の深層格の研究について考察した上で、フィルモア（1975）の感情動詞文の必須構成要素

について論じ、さらに、国立国語研究所（1997）の研究を基に深層格と表層格の対応関係について一覧表を作り、深層格を35種に分け、表層格の「ニ」格に対応する深層格の表を作成する。

4.4「『ニ』格感情動詞の『ニ』の深層格」では、日本語の「ニ」格感情動詞の表層格「ニ」を表す深層格について分析する。

4.5「『ニ』格感情動詞の深層格と直接受身」では、「酔う・湧く・おろおろする・うっとりする・浮かれる」などの「直接受身文」の用例が見当たらない「ニ」格感情動詞の深層格について考察し、その結論を検証するために、その深層格に「直接受身」が可能かどうかを確かめる。さらに、それを例証するため、例文を受身文から能動文に転換し、深層格について分析を行う。

4.6「対象格を持つ『ニ』格感情動詞の直接受身成立と有情物、無情物の関係」では、「ニ」格の深層格が「対象格」である場合の主語の無情性・有情性とその直接受身成立の関係について分析を行う。

4.7「『ニ』格感情動詞の直接受身文の成立条件のまとめ」では、日本語における「ニ」格感情動詞の直接受身成立条件についてまとめる。

4.8では、第4章のまとめを行う。

第5章　中国語の受身表現

5.1「中国語の受身の定義及び分類」では、先行研究から中国語の受身の定義及び分類について考察する。

5.1.1では、王力の「受身説」について考察する。

5.1.2では、「中国語の『被動句』の定義及び特徴」について先行研究から論じる。

5.1.3では、「中国語の『被動句（受身）』の分類」について、呂叔湘（1980）、傅雨賢（1986）、趙清永（1993）、張興旺（2008）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

についてまとめる。その他、劉月華他（1991）、陳昌来（2000）、高橋弥守彦（2013）、王暁潔（2014）の研究についてまとめる。

5.1.4では、「中国語の受身構文のまとめ及び本論文の立場」について述べる。

5.2「中国語他動詞の受身表現及び成立条件」では、中国語における他動詞受身構文の成立条件について述べる。

5.3「中国語自動詞の受身表現」では、中国語自動詞の「受身説」について考察し、自動詞受身成立の条件について分析し、まとめる。また、日中自動詞受身表現の異同をまとめる。

5.3.1「中国語自動詞の受身表現の研究①『有標の自動詞被動文』」では、大河内（1983）、中島（1993・2007）の研究を通し、中国語の有標の自動詞被動文について分析を行う。

5.3.2「中国語自動詞の受身表現の研究②『無標の「被動句」』—『領主句』」について、郭継懋（1990）、徐傑（1999）、沈家煊（2006）、刘暁林（2007）、石毓智（2007）、潘海華・韓景泉（2008）、兪理明・呂建軍（2011）などの研究について触れ、「領主句」という中国語の自動詞受身文の名称について論じ、馬志剛（2012）の①財産身体部位、②親族関係、③社会的関係の三つの観点から、領主句について分析する。

5.3.3では、中国語自動詞受身表現についてまとめる。

5.4「中国語感情動詞の受身表現」では、中国語感情動詞の定義、分類、受身表現及び日中感情動詞の異同について論じる。

5.4.1「先行研究における感情動詞の定義或いは範疇」では、胡裕樹・範暁（1995）などの先行研究を通し、感情動詞の定義について考察する。

5.4.2「中国語感情動詞の分類」では、範暁（1987）、楊華（1994）、張京魚（2001）、張積家ら（2007）、文雅麗（2007）などの研究を通し、中国語の感情動詞の分類について考察する。

5.4.3「中国語感情動詞の自他性及び受身表現」では、馬建忠（1898）、陳承澤（1922）、張京魚（2001）、蘭佳睿（2014）などの研究を通し、先行研究での中国語感情動詞の自他性及び受身表現について分析する。

5.4.4「中国語感情動詞の受身の成立条件」では、中国語の2種の感情動詞について、それぞれの受身成立条件を考察し、分析を行う。

5.4.5では、中国語感情動詞の直接受身表現をまとめる。

第6章　自動詞及び感情動詞の受身表現の日中対照

本章では、日中の自動詞及び感情動詞の受身表現について対照し、まとめる。

第7章　まとめ及び将来の課題

本章においては、本論文のまとめ及び将来の課題について述べる。

第2章

日本語の受身表現についての先行研究

2.1 「受身」の一般的な定義

まず、本研究の対象である「受身」の定義について考察し、日本語の受身と英語をはじめとするヨーロッパ言語の「受動態」の定義との相違点を考察してみよう。

2.1.1 ヨーロッパ言語の受動態の定義

日本語の「受身」の定義に対し、ヨーロッパ言語の「受動態」という言葉が使われている。この「受動態」に関しては『ラルース言語学用語辞典』、『現代言語学辞典』、『ロングマン言語教育辞典』と『オックスフォード言語学辞典』などの辞典では下記のように定義している。

1) 『ラルース言語学用語辞典』

『ラルース言語学用語辞典』(1980) では、受動態 (仏 passif/英 passive) について、「他動詞能動文に対応し、その主語が動作主になり (フランス語においては前置詞 de あるいは par によって導かれる)、また目的語の方は、助動詞 etre と他動詞の過去分詞とできた1つの動詞の主語になることによって成立してい

る文を、〈受動文〉を称する」[1] と述べ、下記のような例文を挙げている。

(1) Le vent a casse la branche.「風で枝が折れた」[2]

(2) La branche a ete cassee par le vent.「木の枝は風で折れた」[3]

例文によると、フランス語の受動態の構造は、他動詞能動文の主語（(1) の「Le vent」）が前置詞 par によって導かれて受動文 (2) の動作主「le vent」になり、また例 (1) の目的語の「la branche」は、助動詞 etre と (1) の他動詞「casse」の過去分詞とで、できた一つの動詞（例 (2) の）「ete cassee」の主語「La branche」になるというような構造であることが分かる。つまり、フランス語では、動作主と受動者との主語の交換によって受動態が成立できることが明らかになる。

2）『現代言語学辞典』

『現代言語学辞典』(1997) では、「受動態」について、以下のように述べている。

> Passive (voice)《受動態》(文) 態 (VOICE) の種類の一つ。基本的に言えば、動作・作用の客体が主語 (SUBJECT) である場合の態・動作の方向は被動作主 (PATIENT) ←動作主 (AGENT) である。受身、受動相、被役相などともいう。例：

1 『ラルース言語学用語辞典』(1980) p208。
2 原文のまま。
3 原文のまま。

英語 America was discovered by Columbus.（アメリカはコロンブスによって発見された）、ドイツ語 Amerika wurde von Col-mbus entdeckt.（同上）、フランス語 L' Amerique fut decouverte parColomb.（同上）。受動態は、しばしば能動態（ACTIVE）に対する。

（『現代言語学辞典』1997：471）

『現代言語学辞典』でも、英語・ドイツ語・フランス語などのヨーロッパ諸言語の受動態文は、能動文の動作・作用の客体を主語とする文であると指摘していることが分かる。

3）『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』

『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』(2012) では、「Voice 態」から受身を分析し、受身を「受動態（passive voice)」と称し、「Voice 態」の中の一つの態としている。また、受動態と能動態について、以下のように述べている。

言語が、動詞とそれに関連する名詞句との関係を表す方法。二つの文は、態は異なっていても、同じ基本的な意味を持つということがありうる。しかし、強調の変化があり、一方の文がより適切であるということがある…（APPROPRIATENESS 参照）。たとえば次の文：The wind damaged the fence. では、the wind が動詞 damaged の主語で、能動態（active voice）である。一方、次の文：The fence was damaged by the wind. では、the fence が was damaged の主語で、受動態（passive voice）である。最初の文は、次の問いに対してふさわしい答えであろう。

Did the wind damage anything?

一方、二番目の文は、次の問いに対するふさわしい答えであ

ろう。

How did the fence get damaged?

以下のようないわゆる「無動作主」受動文は、話し手や聞き手が原因を知

らなかったり、述べたくないとき、または原因が明らか過ぎて述べる必要が

ないときに使われる。

The fence has been damaged.

（『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』2012：507）

『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』（2012）では、能動態と受動態の文は態が異なっているが、基本的な意味は同じであるとし、この二つの表現は強調する点、或は焦点化するところが異なると述べ、英語の受動態文には動作主が隠されていることがあると指摘している。また、「The fence was damaged by the wind（この柵は風によって）」、及び「The fence has been damaged」は受動文であるが、主語の「The fence」は無情物であることは明らかである。

4）『オックスフォード言語学辞典』

『オックスフォード言語学辞典』（2009）では、受動態について以下のように述べている。

（構文、文などに関して）動詞が有標の形態で、その主語が特徴的に被動者であることをいう。［「受け身」または「受動形」ともいう。］例えば、The countryside is destroyed by motorways のような受動文では、主語 the countryside が破壊されるものを表し、動詞は有標の形態の分詞（destroyed）で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com